第２回「大分ユーモアまんが大賞」審査発表

■最終審査会
日時: 1月7日(土)　午後３時30分より
会場: 別府大学 別府キャンパス　４号館４階　ＰＣ４教室

■審査員コメント

○友永　植（別府大学文学部長）
応募総数も大幅に増加し、大変喜ばしく思っております。大分から「ユーモア文化」を全国に発信できるのではという期待を感じています。ストーリー 分野では、現実感のある作品もあり、ユーモアのとらえ方を考え直したところです。また、一コマまんがの中には、社会情勢を活写した作品も見られ、 マンガの原点を教えられた思いです。全国から多数のご応募をいただきましたが、大分県内の応募者が少々寂しかったことは、主催者サイドの反省点と 考えています。

○クニ・トシロウ（別府大学教授・アニメ担当）
企画も２回目は低調になるジンクスのようなものがありますが、応募作品数が５割増とうれしい限りです。ストーリー・四コマ部門はバラエティに富んでいて、楽しめる作品が多かったです。本学学生も、受賞はありませんでしたが、充分戦える実力を付けてきています。これからが楽しみです。一コマ部門は、飛びぬけた作品がなく、ちょっと寂しかったですね。

○田代しんたろう（別府大学教授・マンガ担当）
ストーリー・四コマ部門はいろいろなタイプのまんが作品が揃い、大いに楽しんで読むことができました。賞に入らなかった作品の中にも、とても個性的でユニークなまんがが多く、審査に迷いました。一コマ部門は、やや低調だったように思いますし、高齢化が進んできていることも気がかりです。若いユーモアセンスの出現に期待したいです。

○吉田　寛（ユーモアコピーライター）
質・量ともにレベルが上がって審査のし甲斐がありました。読むだけで自然に笑いがこみあげてくる作品が多数あり、読者としても楽しめました。大賞受賞作の「アトリエこわだ」は、絵柄と内容がよくマッチしていること、台詞が無くても笑えること…この二点で優れていました。一コマまんがは、《おしゃれ感覚》が大事だと再確認しました。大賞の「寒い日」は、じんわりと暖かみの伝わる良い作品でした。

○岩豪友樹子（歌舞伎・舞台脚本家）
昨年よりさらに質が高まり、どの作品も甲乙付けがたく、大いに悩みました。一応順位づけに基づいて点数を付けさせていただきましたが、ほとんど差がないと思っています。優秀作品の「鬼ぶんご」は臼杵の般若姫伝説をベースにしており、岐阜県の方がよく大分のことを調べ、研究してくださったなぁと、感心しました。一コマまんがの応募が少なめだったようですが、賞金を上げてはいかがでしょうか。（笑）

○ジ・アッチィー（「大分プロレス」代表）
タイプの異なる作品が多く判断が難しかったですが、《読後どれだけ強く記憶に残るか》を評価の基準として選考しました。入賞を逃した学生さんの作品の中に、いわゆる《お笑いマンガ》ではなく、シビアな内容ながら心温まるストーリーがあり、ユーモアのとらえ方を考え直させられました。一コマ作品は、よく考えたなぁ…と感心させられる作品が多数ありました。